

石川允さんを訪ねて

息子から見た都市計画家・石川栄耀氏の姿とは。

近代都市計画の先駆者、石川栄耀氏（以下、栄耀氏）をきっかけに、東京・渋谷などでまちづくりに取り組む人たちの輪が広がり、『えいよう会』が始まりました。発足から2年半余が経ち、この間、栄耀氏に関する書籍が発刊されるなどその理念や実績に改めて注目が集まっています。そんな栄耀氏の人物像に少しでも触れたいと考え2010年11月14日、栄耀氏のご長男、石川允さん（以下、允氏）と奥様の富美子さんに、濱出憲治氏、渡邊耕氏、牧野洋久の3人で、お話を伺いしてきました。



「親父もわしも、本当に
都市計画が好きだった」

詩的センスを持つ技師

「ああいう人は、どういう風につかんでよいか分からない。ただね、おやじもわしも、本当に都市計画が好きだった。普段は柔らかいけど、仕事になるとおっかない。そんな人でした」。允氏は、栄耀氏をこう評する。栄耀氏は、都市計画法公布の翌年、1920（大正9年）に内務省（当時）の都市計画技師になった。「おやじたちは道路網をつくっていた。あのころはみんな素人でしたから、自分で勉強したんですよ。日本で初めてのことだから、面白かったらうね」（允氏）。

允氏も、建設省（当時）に入り都市政策などに従事した。栄耀氏が東京都に移った後だったが、父を知る人の部下になることもあったそう。允氏によると「（栄耀氏は）上司にかわいがられていたね。非常に発想が良く、それでいて役人くさくない。平気で何でもやっただろう」。ただ、「頭の回転が速すぎて周りは困った。勉強なら良いけど、仕事でも先走っちゃうんだよ。後になって『しまった！』ってこともあった（笑）」（允氏）とも。

栄耀氏は、専門書から児童読本まで、都市計画に関する多くの論考を残している。允氏は「会議の最中も書いていた。原稿を見ると、それがまた良いんだよ。まるで詩だ。あの真似はできない」と振り返る。栄耀氏は、努力家でもあった。東京帝国大学（東京大学）の受験時は身体が悪く人力車で試験に行ったそうだ。允氏は「一生懸命勉強したみたいですよ。東大で成績が1番じゃないことも憤慨していた。秀才だったんでしょね」と話す。教育への思いもあった。「早稲田大学教授になり、『先生は良いものだ』と喜んでた。本当は、東大教授になりたかったらうね」（允氏）。